

〈新刊紹介〉

(価格は税込定価)

揚妻祐樹著『日本近代文学における「語り」と「語法」』

本書は、明治20年代以降の小説の文章について論じたものであり、文章における表現意図の動態的実践である「語り」と、文法・語彙・表記など「語り」の静態的痕跡である「語法」の観点から考察が行われている。

本書は全5編18章からなる。「序章 研究の観点と全体の概要」に続いて「第1編 文章とは何かについて、及び本書の研究対象と研究方法」には「第1章 文章論序説(一)——言語表現における「成り下がり」について——」「第2章 文章論序説(二)——文化としての言語(コセリウに寄せて)——」「第3章 文章論序説(三)——本書の言語観・研究対象・研究方法——」「第4章 序論補説「語り」と文法——文章研究のために——」を収める。「第2編 尾崎紅葉の語りと語法」には「第5章 尾崎紅葉の文章観——〈隠形〉と〈顕形〉の狭間で——」「第6章 尾崎紅葉『多情多恨』の語りと語法(一)——語りの性格——」「第7章 尾崎紅葉『多情多恨』の語りと語法(二)——ノアアルの文体——」「第8章 肉声の語り——尾崎紅葉『伽羅枕』における「地」「心話」「発話」の処理——」「第9章 尾崎紅葉『金色夜叉』の語り——演劇的な語り——」「第10章 尾崎紅葉『金色夜叉』における不可能表現の特徴——漢文訓読系の語法と和文系の語法——」を収める。「第3編 偶然確定条件」には「第11章 条件表現から見た「語り口」の問題——三遊亭円朝の人情話速記本を資料として——」「第12章 文体面から見た偶然確定条件の諸相——落語SPレコード・『夢酔独言』・尾崎紅葉の言文一致体小説を中心に——」「第13章 偶然確定条件から見た二葉亭四迷の文章」を収める。「第4編 その他の語りと語法、及び文章観について」には「第14章 語りと語彙——二葉亭四迷『あひゝき』初訳・改訳間の自立語対照——」「第15章 時代小説におけるノデアッタ・ノダッタ」「第16章 『普通文章論』に見る幸田露伴の文章観」を収める。「第5編 結論」には「第17章 全体のまとめ」「第18章 補説 語りと時間表現」を収める。末尾に「索引(人名・事項)」「あとがき」を付す。(川島拓馬)

(2023年3月15日発行 和泉書院刊 A5判横組み 456頁 定価11,000円 ISBN 978-4-7576-1062-0)

田野村忠温著『英語東漸とその周辺』

本書は、東アジアにおける英語の受容をテーマとする著者の論考をまとめたものである。中国と日本における初期英語辞書・学習書の分析をはじめとして、日本人の英語学習と中国の語学書の関わり、英語音声の知覚と表記、音訳と意識、言語名の歴史、和製英語など関連する諸問題が論じられている。

本書は全5部17章からなる。「序」に続いて「第I部 初期英語学習書」には「第1

章 『華英通語』道光本と中国初期英語学習書の系譜——『華英通用雜話』から『華英通語』咸豐10年本まで——」「第2章 『英吉利国訳語』の編纂者と編纂過程——中国最初の英語辞典の分析——」「第3章 北京故宫博物院蔵『華夷訳語』丁種本第1類の分析——西洋館訳語の編纂者とドイツ語の名称の問題を中心に——」「第4章 日本最初期英語学習書の依拠資料と編集——『諸厄利亞言語和解』『諸厄利亞興学小筈』『諸厄利亞語林大成』——」「第5章 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』の原本と編集——附論 [v]音の仮名表記——」「第6章 日本人の初期英語学習における中国の出版物の利用」を収める。「第Ⅱ部 注音」には「第7章 清代の欧州諸言語の辞書、学習書における注音方式——音節構造の処理——」「第8章 中国初期英語学習書における流音の注音」を収める。「第Ⅲ部 音訳と意識」には「第9章 音訳と意識——概念の体系化と歴史——」「第10章 音訳語における口偏の機能——口偏蔑視表示説の検討——」「第11章 日本語の音訳と意識の初期相に関する覚書——欧州諸言語からの語句の編入——」を収める。「第Ⅳ部 言語名」には「第12章 言語名「英語」の確立」「第13章 中国語を表す言語名の諸相——その多様性、歴史、用法差——」「第14章 日本語の呼称の歴史」を収め、各章には各言語名に関する年表を付している。「第Ⅴ部 和製英語」には「第15章 和製英語——悪習との訣別——」「第16章 ダッシュ、プライム」「第17章 a'の英語における読みの歴史——「ダッシュ、プライム」余論——」を収める。末尾に「西洋人名対照表」「後記」「索引（事項索引・語彙索引）」を付す。（川島拓馬）

（2023年6月20日発行 和泉書院刊 A5判横組み 544頁 定価11,000円 ISBN 978-4-7576-1072-9）

定延利之著『やわらかい文法』

本書は、著者による文法研究の成果を一般の読者向けにまとめたものであり、豊富な具体例を交えながらやさしく記述されている。扱われているテーマは体験、キャラ、きもち、場面性、発話の権利など多岐にわたり、人々の現実の言語使用に見られる仕組みを解き明かそうとしている。

本書の構成は以下のとおり。「まえがき」に続き、「1章 面白い話と体験の文法」「2章 キャラ」「3章 いま・ここからの眺め」「4章 文」「5章 きもちの文法」「6章 場面性と脱場面性」「7章 発話の権利」「8章 非流暢な言い方」「9章 狩人の知恵とクマの知恵」「10章 人々の声」。末尾に「あとがき」を付す。（川島拓馬）

（2024年2月28日発行 教養検定会議刊 新書判横組み 174頁 定価1,650円 ISBN 978-4-910292-09-0）

曾睿著『字音形態素から見る語構成と節構成の研究』

本書は、2018年に東北大学に提出された著者の博士学位論文に加筆・修正を行ったものである。漢語・和語・外来語に後接する非自立的な字音形態素「車・機・感・性・式・風」を主な研究対象とし、それらが語レベルを超えて句・節までも構成する様を丁寧に記述・分析している。上記6つの字音形態素に加えて「的」などについても言及さ

れている。本書後半では日本語と中国語で同形の字音形態素を取り上げて比較・検討している点から、形態論と統語論の連続性に着目した日中対照研究の側面も備えている。

本書の構成は全3部10章からなる。内容は以下のとおりである。「まえがき」「序章 字音形態素とは何か——先行研究と本書の位置づけ——」に続き、「第1部 字音形態素から見る語構成」には「第1章 物を表す「車（シャ）・機（キ）」について」「第2章 感覚を表す「感（カン）」について」「第3章 属性を表す「性（セイ）・式（シキ）・風（フウ）」について」「第4章 字音形態素と語構成」を収める。「第2部 字音形態素から見る語構成と節構成の連続性」には「第5章 「感・式・風」の語構成から節構成への連続性」「第6章 句・節・文に接続する「感」の位置づけ——名詞「感じ」との比較を通して——」「第7章 述部から見た字音形式「感」の語構成と節構成の関係」「第8章 語構成から節構成へ」を収める。「第3部 日中対照から見る日本語の語構成と節構成」には「第9章 日中同形漢字形態素の対照——「車」と「式」を対象として——」「第10章 語構成と句構成に関する日中対照研究——字音形式「感」を通して——」「終章 字音形態素の拡がり」を収める。末尾に「あとがき」「参考文献」「初出一覧」「索引」を付す。なお、本書は佛教大学研究叢書の第48巻として刊行された。（竹村明日香）

（2024年3月10日発行 ミネルヴァ書房刊 A5判横組み 338頁 定価11,000円 ISBN 978-4-623-09720-3）

井上直美著『日本語能力試験の「級外項目」に関する記述的研究——テ形接続の機能語を中心に——』

本書は、ニア・ネイティブレベルを目指す日本語学習者への支援を目指し、学習者が調べたくても調べられない機能語類について、その意味・機能を詳細に記述したものである。具体的には『日本語能力試験の出題基準〔改訂版〕』を指標とし、そこに記載のない「級外項目」と、記載のある機能語類の下位用法や抜け落ちた注意点である「級外下位ポイント」に該当するテ形接続の機能語を取り上げて考察を行っている。

本書の構成は以下のとおり。「序章」に続き、「第1章 「～ておく」の級外下位ポイント——「～ておく」の使用類型と失礼さとの関係——」「第2章 「～ていく」の級外下位ポイント——歴史的回想を表す「～ていった」——」「第3章 級外項目「～てみせる」——事態が未実現か既実現かに注目して——」「第4章 級外項目「～てみせた」——書き言葉の文末に現れる「～てみせた。」に注目して——」「第5章 級外項目「～てよこす」——「～てよこす」のぞんざいな印象の正体——」「第6章 級外項目「～てナンボ」——使用される方言に注目して——」「第7章 級外項目「～てのける」——「しにくいこと」に注目して——」「第8章 級外項目「～てたまるか」——「Vるものか」との比較から——」「第9章 級外項目「～てしかるべき」——「～べきだ」との比較から——」「第10章 級外項目「～ておくれ」——「～てくれ」との比較から——」「第11章 級外項目「お／ご～おき下さい」——「お／ご～下さい」との比較から——」、および「終章」を配する。末尾に「あとがき」を付す。（川島拓馬）

(2024年4月1日発行 日中言語文化出版社刊 A5判横組み 272頁 定価2,200円 ISBN 978-4-905013-26-6)

谷村緑・仲本康一郎・吉田悦子編『インタラクションと対話——多角的な視点からの研究方法を探る——』

レゴブロックを二人一組で組み立てる際の対話を「課題達成対話データ」と名付け、そのデータを談話分析・認知言語学・心理言語学・応用言語学・言語情報処理などの観点から分析したコミュニケーション研究の論集である。対話の参加者は英語母語話者・日本語母語話者・日本人英語学習者からなる。話者の間に「衝突あり／なし」の条件を加えて撮影されたビデオ資料であるため、分析の際には音声だけでなく視覚情報も利用されている。「基盤化」という概念を本書の中心テーマに据えており、話者が会話相手と理解を共有する際にはどのようなメカニズムが働いているのかという点に注目している。

本書の構成は以下のとおりである。「はじめに」「第1章 課題達成対話データの概要(谷村緑)」に続き、「基盤化と発話連鎖」の部で「第2章 課題達成対話において基盤化を志向する言語・非言語情報の多層的関与(岡本雅史)」「[コラム] 基盤化と共通基盤、閉世界と開世界(高梨克也)」「第3章 対話における非対称性をどう調整するか——質問発話が後続の発話連鎖に与える影響——(吉田悦子)」「第4章 日本語母語話者の英語対話コーパスに対する深層言語モデルを用いた単語予測の分析と評価(岡田真)」「[コラム] 深層言語モデルに関する主な用語(竹内和広)」を収める。続く「基盤化とインタラクション」の部では「第5章 Weによる共同行為の構築——英語教師と英語学習者の非対称性に注目して——(谷村緑・仲本康一郎)」「第6章 レゴタスクにおける概念的・統語的プライミングの役割(田中幹大)」「[コラム] プライミングと言語研究(田中幹大)」「第7章 マルチモーダル分析による空間の相互理解プロセス(谷村緑・吉田悦子)」「[コラム] マルチモーダルアノテーションツール「ELAN」(川端良子)」を収める。「基盤化と概念化」の部では「第8章 日英語のイメージ・メタファー——相互行為のなかの指示と描写——(仲本康一郎・谷村緑)」「[コラム] レトリック再考——直喩と隠喩——(仲本康一郎)」「第9章 課題達成対話からみる日英語の談話スタイル——認知から活動へ——(仲本康一郎・谷村緑)」「[コラム] 文化的思考様式(仲本康一郎)」を収める。末尾に「あとがき」「索引」「執筆者紹介」を付す。なお、開拓社の本書紹介ページから書き起こしデータのダウンロードを申請できる。(竹村明日香)

(2024年6月24日発行 開拓社刊 A5判横組み 216頁 定価3,520円 ISBN 978-4-7589-2401-6)

金愛蘭著『外来語の基本語化——現代新聞「叙述語彙」への進出——』

本書は、抽象的な意味を表す外来語を取り上げ、それまで日本語語彙の周辺に非基本

語として存在していた語が語彙の中心部に移行して基本語となる局面に注目し、その実態を明らかにするものである。分析にあたっては、著者自ら作成した20世紀後半の通時的な新聞コーパスを資料として用いている。

本書は全3部12章からなる。冒頭に「序章 通時的な新聞コーパスによる「外来語の基本語化」研究」を配し、「第1部 基本語化の量的概観」には「第1章 基本語化候補語の抽出」「第2章 基本語彙構造における外来語の進出領域」「第3章 類義語との量的関係から見る基本語化」を収める。「第2部 意味の拡大から見た基本語化」には「第4章 外来語「トラブル」の基本語化(1)」「第5章 外来語「トラブル」の基本語化(2)」「第6章 外来語動名詞「チェック」の基本語化」「第7章 外来語「クレーム」の基本語化とその“挫折”」を収める。「第3部 叙述パタンの獲得から見た基本語化」には「第8章 外来語「ケース」の基本語化(1)」「第9章 外来語「ケース」の基本語化(2)」「第10章 外来語「ルール」の叙述語化」「第11章 文章構成機能から見た外来語の基本語化」「第12章 外来語の氾濫・濫用と叙述語化」を収める。末尾に「あとがき」「索引」を付す。(川島拓馬)

(2024年6月28日発行 大阪大学出版会刊 A5判横組み 310頁 定価5,720円 ISBN 978-4-87259-784-4)

石陽鳴著『近現代日本語における外来語の二層の受容』

本書は、近現代日本語における抽象的な意味を表す外来語の受容について論じたものである。具体的には、個々の語の受容状況・受容パターンを分析することによって、外来語の受容および増加のあり方に関する類型化が行われている。なお本書はひつじ研究叢書〈言語編〉第206巻として刊行された。

本書の構成は以下のとおり。「はしがき」に続き、「序章 外来語史研究における課題」「第1章 近現代における外来語「センス」の変遷」「第2章 近現代における外来語「システム」の変遷」「第3章 近現代における外来語「ポイント」の変遷」「第4章 近現代における外来語「イメージ」の変遷」「第5章 近現代における外来語「パターン」の変遷」「第6章 近現代における外来語「モード」の変遷」「第7章 近現代における外来語「インプット」の変遷」「第8章 近現代における外来語受容の歴史」「終章 本書のまとめと課題」。末尾に「後記」「刊行によせて(大木一夫)」「索引」を付す。(川島拓馬)

(2024年6月28日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 296頁 定価8,140円 ISBN 978-4-8234-1242-4)

金水敏編『よくわかる日本語学』

本書は、日本語学および関連する諸分野を専攻する大学生、また日本語学に関心を持つ他分野の研究者や一般の読者を対象とした入門書であり、日本語・言語研究の面白さと言葉の不思議さを伝えるものである。取り扱われている各項目について、執筆陣が研

究の最前線のエッセンスをやさしく、楽しく学べるように解説している。なお本書は、ミネルヴァ書房の「やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ」として刊行された。

本書は全8章からなり、その内部に設けられたトピックは77に及ぶ。冒頭の「はじめに」に続き、「1 日本語の定義」「2 音声・音韻と表記」「3 形態論」「4 語彙論」「5 統語論・文の意味論」「6 文章・文体・表現論」「7 言語行動・社会言語学・応用日本語学」「8 日本語の歴史」。末尾に索引を付す。(川島拓馬)

(2024年7月10日発行 ミネルヴァ書房刊 B5判横組み 202頁 定価2,750円 ISBN 978-4-623-09620-6)

砂川有里子著『日本語コーパスの世界へようこそ——気になる言葉の使い方を調べてみよう!——』

本書は、一般の読者向けに、コーパスの有用さ、面白さ、またコーパスを通して見える日本語の興味深い現象についてやさしく解説したものである。豊富な具体例を挙げながら、読み物風の記述が行われている。

本書の構成は以下のとおり。「はじめに」に続き、「1 「きらきら」と「キラキラ」」「2 無意識に使ってしまう「～てしまう」」「3 「〇〇音痴」と「〇〇外れ」」「4 「〇〇活」と「〇〇感」」「5 逃亡先は「海外」か「国外」か」「6 オネエ言葉と女言葉」「7 「男」と「女」の描き方」「8 職場で人を何と呼ぶ?」「9 「うそだ!」はめめかしい?」「10 「全然」と「全く」。末尾に「はじめのコーパス使い方ガイド」「おわりに」「索引」を付す。(川島拓馬)

(2024年8月5日発行 大修館書店刊 四六判縦組み 160頁 定価2,200円 ISBN 978-4-469-22283-8)

瀬戸賢一著『レトリック探究』

本書は全3巻からなる「レトリックの世界」の第1巻に当たる。最もレトリックらしいと言われているメタファー(隠喩)を始めとして、シミリー(直喩)、シネクドキ(提喩)、メトニミー(換喩)について論じる書である。最後の補章ではメタファー・メトニミー・シネクドキを「認識の三角形」として捉え直し、それらが我々の認識に果たす役割について考察されている。学術論文風の書き方をあえて避けた記述になっており、予備知識がなくともレトリックの魅力と奥深さが読者に伝わるよう工夫されている。夏目漱石、村上春樹、三浦しをん、村田沙耶香などの近現代小説の例だけでなく、古典の名文、慣用語、日常生活での身近な例なども挙げつつ解説されている。

本書は全4章と補章からなる。「第1章 開拓するシミリー」「第2章 深掘りするメタファー」「第3章 伸縮するシネクドキ」「第4章 横すべりするメトニミー」「補章「認識の三角形」。末尾に「あとがき」「参考文献」「引用文献」「言及辞書」「索引」を付す。(竹村明日香)

(2024年8月9日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 264頁 定価3,520円 ISBN 978-4-8234-1232-5)

中川秀太著『現代日本語のジェネレーションギャップ』

本書は、世代間に見られることばの差異を「断絶」と捉え、近現代における日本語の移り変わりについて論じたものである。具体的な対象としては、発音・アクセント、表記、語構成、語彙・意味にわたり、世代間でのことばの断絶がどのような点で生じているかを明らかにしている。

本書は全24章からなる。冒頭に「1 序章」「2 日本語検定の方法と現状」「3 標準語について」を配し、次いで発音・アクセントに関する部として「4 近現代における発音・アクセントの移り変わり」「5 東京の固有名アクセントの動揺」「6 語形の世代差（断絶）」を収める。表記に関する部として「7 国語辞典の語の表記」「8 教科書と放送における標準表記の比較」「9 動詞の表記」「10 サ変動詞語幹の表記および読みがなの基準について」「11 副詞の表記」「12 「常用漢字表」の一字下げの音訓について」を収める。語構成に関する部として「13 和語への言いかえ」「14 和語による造語について」「15 漢語・外来語の略語」「16 接頭辞としての「一」の使い方について」「17 字音形態素「両」の意味・用法について」を収める。語彙・意味に関する部として「18 ことばにおける世代間の断絶について」「19 比喩的語義の問題点」「20 現代の類義語の中にある歴史」「21 対義語・類義語と世代」「22 現代語における動詞の移り変わりについて」「23 現代の漢語サ変動詞における消長」「24 現代語における使用が衰えた形容詞・形容動詞」を収め、末尾に「あとがき」を付す。（川島拓馬）

（2024年8月22日発行 武蔵野書院刊 A5判横組み 548頁 定価12,100円 ISBN 978-4-8386-0797-6）

宇佐美まゆみ著『ポライトネス理論——発話行為から談話へ——』

本書は、20世紀を代表するコミュニケーション理論の一つであるブラウンとレヴィンソンの「ポライトネス理論」の全貌を、これまであまり知られていなかった側面にも焦点を当てて解説することを目的とするものである。さらに、その後の議論を踏まえて著者が提唱した「ディスコース・ポライトネス理論」の全貌についても解説が行われている。両者に対する解説によって、現在におけるポライトネス理論研究の現状とその発展の可能性について論じた一冊となっている。

本書の構成は以下のとおり。「はじめに」に続き「序章」「第1章 ポライトネス研究の変遷——1960年代から現在（2020年代）まで——」「第2章 ブラウンとレヴィンソンのポライトネス理論——その全貌——」「第3章 ブラウンとレヴィンソンのポライトネス理論の反響・批判・課題」「第4章 文レベルから談話レベルのポライトネス理論へ——DP理論への導入——」「第5章 ディスコース・ポライトネス理論——全体像——」「第6章 DP理論の適用と応用研究」「終章 DP理論の課題と今後の展開」。末尾に「あとがき」と索引を付す。（川島拓馬）

（2024年8月23日発行 大修館書店刊 A5判横組み 298頁 定価4,400円 ISBN 978-4-469-21398-0）

島山雄二・本田謙介・田中江扶著『日本語の構造分析』

本書は、日本語文法に関わる諸現象について、著者らが自らの容認性判断をもとに理論的に分析したものである。特に、伝統的な国語学に基づく文法と生成文法の垣根を取り払い、日本語文法の本質に迫るアイデアの探究が目指されている。

本書は全4部23章からなる。「まえがき」に続き、「第I部 日本語文法の統語分析」には「第1章 日本語の動詞重複構文」「第2章 日本語の代名詞「本人」」「第3章 「放題」構文の統語構造」「第4章 日本語の様態副詞と結果述語の統語論」「第5章 日本語の「と」節と「ら」節の統語論」「第6章 名詞句の義務的削除：「先読み」規則の必要性」「第7章 逆接詞「るも」」「第8章 日本語の複数表現と不適正移動」を収める。「第II部 伝統文法と生成文法の架け橋」には「第9章 橋本文法とミニマリスト・プログラム」「第10章 動詞語幹をつくる接辞rについて」「第11章 形容詞語幹をつくる接辞kについて」「第12章 「イ脱落現象」再考」「第13章 日本語の指示詞「こ」「そ」「あ」再考」「第14章 連体詞「ある」と日本語の単数形」「第15章 金田一（1950）再考」を収める。「第III部 日本語の構文」には「第16章 使役を表す「受動文」」「第17章 「のなんの」構文の認可条件について」「第18章 「何がXだ」構文」「第19章 「方をする」構文と身体属性構文」「第20章 英語の to think that 構文と日本語の「とは／なんて」構文」「第21章 「この本は売れない」の曖昧性をめぐって」「第22章 「酒を飲んで運転した」の曖昧性をめぐって」を収める。「第IV部 日本語文法研究の継承」には「第23章 日本語の文法現象と第二言語習得——母語の文法を実感すること——」を収める。末尾に「あとがき」と索引を付す。（川島拓馬）

（2024年8月30日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 344頁 定価4,950円 ISBN 978-4-87424-987-1）

小林芳規著『小林芳規著作集 第六巻 文体・文法・語彙』

本著作集全8巻のうちの第6巻に相当するもので、「文体・文法・語彙」に関する論考を収める。文体では漢文訓読体を取り上げ、仮名字体やヲコト点の変遷、私書・漢籍での漢文訓読例、そして明治期の普通文に見られる「花を見るの記」のような語法について論じるほか、土佐日記の文体や石山寺蔵の片仮名交じり文についても扱う。文法では昭和36年時点での文法研究史を顧みたま論考や、助動詞・助詞における特定の用法を考察した論考を収める。語彙では訓点資料と中世の口頭語の一端を取り上げている。

収録論文は以下のとおり（旧字体は新字体に改めた）。「凡例」に続き、「漢文訓読体」「漢文訓読文体の歴史」「土佐日記の文体」「石山寺蔵の片仮名交り文について」「文法研究の歴史」「副助詞「し・しも・ばかり・のみ」」「「花を見るの記」の言い方の成立追考」「幻の「^ま来たかた」——古典文法の一問題——」「藤原為房妻の消息の用語——平安時代の連体形終止を中心に——」「訓点資料と文法」「訓点資料に見える「ズキ」の用法」「訓点資料の語彙」「法華百座聞書抄のことども——附「サルデハ私語」考——」。（竹村明日香）

小野寺典子著『談話標識へのアプローチ——研究分野・方法論・分析例——』

本書は、談話標識（ディスコースマーカー）研究に関わる概念や様々なアプローチを解説したものである。研究史を振り返りつつ談話標識研究の主要なアプローチを概観し、また日英語を対象とする共時的な分析、および通時的な分析を紹介することで、談話標識から文法、言語学を問い直す試みがなされている。

本書の構成は以下のとおり。「まえがき」に続き、「第1章 はじめに」「第2章 談話標識への異なる研究アプローチ」「第3章 談話標識研究の主要な3アプローチ」「第4章 現代語における談話標識の日英対照分析（共時的分析の日英語比較）」「第5章 談話標識の通時的分析（日英語比較）」「第6章 談話標識から文法・言語学を問い直す」。末尾に「あとがき」「索引」を付す。（川島拓馬）

(2024年9月24日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 200頁 定価3,080円 ISBN 978-4-8234-1230-1)

Martin Hilpert 著、大堀壽夫・貝森有祐・岩井恵利奈・山田彬亮訳『構文理論——基礎から応用へ—— (Construction Grammar and its Application to English, Second edition)』

2014年刊行の初版に2章分（9章・10章）を追加した第二版の訳書である。構文理論（Construction Grammar）の入門書で、形態論、語彙意味論、語用論の領域にわたって英語の構文との関連が説かれている。第1章から第5章までは理論の基礎部分に当たる。「言語を知っているという時、何を知っているのか？」という問いかけから始まり、「構文」の定義、項構造構文の解説、コンストラクティコン（＝構文彙）や形態論的構文、そして情報パッケージ構文と呼ばれる旧情報に新しい意味を関連付ける際の構文について論じられる。第6章から第10章までは応用編で、言語処理や子供の言語獲得、言語の社会的変異・歴史の変異、話し言葉における構文、言語接触などについて論じられる。各章の末尾には「学習課題」と「読書案内」が備わる。

本書の構成は以下のとおり。「初版序文：本書を手にはしてはいけない、まして読んだりしてはいけないわけ」「第二版序文」「謝辞」に続き、「第1章 構文理論：導入」「第2章 項構造構文」「第3章 コンストラクティコンの内側」「第4章 構文形態論」「第5章 情報パッケージ構文」「第6章 構文と言語処理」「第7章 構文と言語獲得」「第8章 言語変異と言語変化」「第9章 話しことばの中の構文」「第10章 文法間を横断する構文」「第11章 結び」。末尾に「参考文献」「索引」「訳者解説」「著者・訳者紹介」を付す。（竹村明日香）

(2024年9月24日発行 開拓社刊 A5判横組み 344頁 定価4,620円 ISBN 978-4-7589-2403-0)

藤井貞和著『文法の詩学——意味語／機能語の動態——』

著者の『文法的詩学』（笠間書院、2012年）と『文法的詩学その動態』（笠間書院、2015年）を合綴して内容を大幅に修正した書である。源氏物語研究者でなおかつ詩人でもある著者の「機能語が意味語を下支えする」という文法解釈が、古代日本語の豊富な用例と共に示される。

本章は全4部25章からなる。「序章 「あけがたには」の詩学」に続く「第一部 機能語が意味語を下支えする」には以下15章を収める。「一章 論理上の文法と表出する文法」「二章 時間域、推量域、形容域」「三章 「あり、り」をめぐる」「四章 起源にひらく「き」の系譜」「五章 伝来の助動辞「けり」——時間の経過——」「六章 フルコトの過去、物語の非過去」「七章 「はや舟に乗れ。日も暮れぬ」」「八章 〈いま、さつき、つい先刻〉——「つ」——」「九章 言文一致と近代——「た」の創発——」「十章 推量とは何か（一）——む、けむ、らむ、まし——」「十一章 推量とは何か（二）——伝聞なり、めり——」「十二章 推量とは何か（三）——べし、まじ——」「十三章 らしさの助動辞——「らし」——」「十四章 し、じ、たし——形容、否定、願望、様態——」「十五章 「る、らる」「す、さす、しむ」。「第二部 機能語が意味語を下支えする その二」には以下2章を収める。「十六章 助動辞の言語態」「十七章 「は」の〈主格補語〉性——「が」を覆う——。「第三部 意味語の世界」には以下4章を収める。「十八章 名詞の類——自立語（上）——」「十九章 動く、象^{かたど}る——自立語（中）——」「二十章 飾る、接ぐ——自立語（下）——」、「二十一章 〈懸け詞〉文法」。「第四部 人称と語り、表記」には以下4章を収める。「二十二章 物語人称と語り」「二十三章 語り手人称と作者人称」「二十四章 自然称と和歌表現」「二十五章 漢字かな交じり文」「終章 言語は復活するか——言語社会に向き合う——」。末尾に「あとがき」「索引」を収める。（竹村明日香）

（2024年9月30日発行 花鳥社刊 四六判縦組み 476頁 定価6,600円 ISBN 978-4-86803-007-2）

谷中暉著『ことばの意味を計算するしくみ——計算言語学と自然言語処理の基礎——』

本書は、ことばの意味を計算するしくみの理論についてわかりやすく解説することを目指したものであり、そのためのアプローチとして計算言語学と自然言語処理に関する解説が行われている。とりわけ、計算言語学に関わる形式統語論と形式意味論の理論を丁寧に説明すること、深層学習を中心とした統計的言語処理技術に残る本質的な問題点を提示することに重きが置かれている。

本書は全4部17章からなる。「まえがき」に続き、「第I部 ことばの意味を計算するには」には「第1章 はじめに：文の容認可能性」「第2章 ことばの分析から解析へ」を収める。「第II部 計算言語学からみた、ことばの意味を計算するしくみ」には「第3章 形式統語論の考え方」「第4章 形式意味論の考え方」「第5章 形式意味論の準備：集合論」「第6章 形式意味論の準備：記号論理学」「第7章 形式意味論に基づく

含意関係の計算」「第8章 組合せ範疇文法に基づく意味合成」「第9章 イベント意味論と推論」「第10章 談話意味論」を収める。「第Ⅲ部 自然言語処理からみた、ことばの意味を計算するしくみ」には「第11章 分布意味論」「第12章 ニューラル言語モデル」「第13章 大規模言語モデル」「第14章 分布意味論の特性と問題点」を収める。「第Ⅳ部 学際的視点からみた、ことばの意味を計算するしくみ」には「第15章 古典的計算主義とコネクショニズム」「第16章 深層ニューラルネットの体系性の分析」「第17章 計算言語学と自然言語処理の融合の展望」を収める。なお、第Ⅱ部と第Ⅲ部には文献案内が整備され、読者への更なる学びが促されている。末尾に「索引」を付す。(川島拓馬)

(2024年10月9日発行 講談社刊 A5判横組み 288頁 定価3,520円 ISBN 978-4-06-536984-5)

乙黒亮・田川拓海著『形態論の諸相——6つの現象と2つの理論——』

本書は、現代の形態論研究において盛んに議論されているテーマの中でこれまであまり取り上げられてこなかったものに焦点を当て、その基本概念を実際の言語現象と合わせて概観すると同時に、それらの現象の理論的分析を提示することを狙いとしたものである。具体的には第3章から第8章で取り上げられる融合、補加法、ゼロ形態、虚形態、阻止、迂言法の6つのテーマを取り上げ、これらの現象に対して分散形態論とパラダイム関数形態論という2つの理論的枠組みでの分析を示している。

本書の構成は以下のとおり。「第1章 はじめに」「第2章 形態論への2つのアプローチ」「第3章 融合」「第4章 補加法」「第5章 ゼロ形態」「第6章 虚形態」「第7章 阻止」「第8章 迂言法」「第9章 おわりに 今後の形態理論の展望」。第2章から第8章には練習問題が付けられ、本書で取り上げられた理論や分析について学びを深めることができる。末尾に「索引」「言語索引」「著者索引」を付す。(川島拓馬)

(2024年10月10日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 272頁 定価3,080円 ISBN 978-4-87424-990-1)

村岡英裕・上村圭介編『言語政策研究への案内』

グローバルな人の移動の増加、多言語化、多様化が意識にのぼりつつある中、言語政策は社会にとって重要な役割を果たしている。本書は、言語政策とその研究分野を示し、言語政策の全体像を明らかにすることを目指したものである。具体的には、言語政策の対象や内容、実現されるプロセス、研究方法といった基礎的なトピックに加え、各分野の知見を紹介する実践的な内容を備えている。

本書は全4部からなり、「はじめに」に続いて「序論 言語政策とは何か(木村護郎クリストフ)」を冒頭に配する。「第1部 言語政策とは何か」には「第1章 「言語政策概念」の多様さ(西島佑)」「第2章 言語の地位(山川和彦)」「第3章 言語の近代化と標準化をめぐる言語政策(原隆幸)」「第4章 異言語間コミュニケーション——グロー

バル化時代に求められる言語政策の特徴——（サウクエン・ファン）」を収める。「第2部 言語問題と人為的介入」には「第1章 出発点としての言語問題（高民定）」「第2章 政策課題から政策決定へ（上村圭介）」「第3章 政策の設計と実施（上村圭介）」「第4章 言語政策の評価（嶋津拓）」を収める。「第3部 研究方法とその特徴」には「第1章 学際研究としての言語政策研究と研究上の課題（村岡英裕）」「第2章 質的研究法としての事例研究（福永由佳）」「第3章 地域研究（沓掛沙弥香）」「第4章 比較研究（貞包和寛）」「第5章 量的研究（寺沢拓敬）」を収める。「第4部 研究の最前線」には「第1章 言語と国際標準（井佐原均・神崎享子）」「第2章 外国語教育（下絵津子）」「第3章 社会統合のための多言語主義・複言語主義（西山教行）」「第4章 言語権と少数言語コミュニティ（杉本篤史）」「第5章 言語サービス（岩田一成）」「第6章 外国人移住者と日本語教育（松岡洋子）」「第7章 継承語教育（落合知子）」「第8章 異文化接触（加藤好崇）」「第9章 コミュニティ・レベルの言語政策（猿橋順子）」「第10章 差別と言語（岡本能里子）」を収める。なお、各部には研究の具体例を示すためのコラムが置かれている。末尾に「おわりに」と索引を付す。（川島拓馬）

（2024年10月25日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 284頁 定価2,970円 ISBN 978-4-87424-979-6）